

何が階級的ヒエラルキーの自明性を支えるのか？

職業威信評定の間主観的な一致度と中心／周辺

京都大学

太郎丸 博

1 問題

支配や社会秩序を維持しているのは、暴力をはじめとしたサンクションのシステムだけではない。支配される人々が支配や秩序に正当性を認めたり、現行の秩序を自明で「自然」なものと認識することによっても、支配や秩序は維持されている。このような問題は社会学の重要な研究課題であるが、職業威信にかんするいくつかの研究も、このような支配／秩序の自明性に関する研究の流れに位置づけることが可能である。職業威信は、当初職業的地位の高さを数量化するために用いられ、産業社会の構造の通文化的な類似性を測る指標として用いられ、1980年頃から人々の社会認識の多様性／類似性を測るための指標として用いられるようになっていった。すべての社会成員がある職業の威信を高いと判断するならば、その職業の威信の高さはより自明で「自然」なものとなる。逆に社会性員の間である職業に関する評価がバラバラであるならば、その職業の威信の高さは議論の余地のあるものとなっていき。職業は階級と深く関係しているので、職業威信の自明性は階級的な支配秩序の自明性の問題でもある。

この報告では、このような職業威信評定の一致度がどのような要因に影響されるのかについて、検討する。この問題に関しては、Zhou (2005) と Lynn and Ellerbach (2017) による米国の1989年のデータの検討があり、周辺的な評定者（低学歴、黒人、女性、低階層）のほうが中心的な評定者よりも職業評定の一致度が低く、職業間の威信格差を小さく見積もる傾向があると報告されている。これは中心的な社会性員のほうが社会の公式的な威信秩序を強く内面化しているのに対して、周辺的な社会性員はこれにかわるオルタナティブな威信序列を共有していないからであると考えられる。このような傾向が現代日本においても存在するのかについて本稿では分析する。

2 方法

データは2017年の2月に郵送法によって回収した質問紙調査の結果である（研究代表者：元治恵子）。母集団は20～69歳の男女で住民基本台帳を抽出台帳としている。200地点から15人ずつ対象者を抽出した多段無作為抽出法であり、有効回収数は1179（回収率=1179/(200×15)=39.3%）である。調査票は5種類あり、評定してもらう職業の種類が異なっている。

分析では、サンプルを性別、学歴、従業上の地位、職業、世帯収入をもとにいくつかのグループに分割し、それぞれの内部での職業評定の類似性を計算し、周辺的なグループのほうが類似性が低いかどうか検討する。また、マルチレベル・モデル（個人の中に評定される職業がネストされているとみなす）を用い、周辺的な評定者ほど職業間の威信の格差を小さく見積もる傾向があるかどうか分析する。

3 結果

データはまだコーディング中のため分析結果は得られていない。結果は当日、報告する。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 15H03414 の助成を受けたものです。

文献

Lynn, Freda B. and George Ellerbach. 2017. "A Position with a View: Educational Status and the Construction of the Occupational Hierarchy," *American Sociological Review*. 82 (1): 32-58.

Zhou, Xueguang. 2005. "The Institutional Logic of Occupational Prestige Ranking: Reconceptualization and Reanalyses," *American Journal of Sociology*. 111 (1): 90-140.